

文化資源としての言語

糟谷啓介

言語を文化資源としてとらえることができるかどうかという議論に入る前に、いくつか確認しておきたいことがあります。

わたしたちは一般的な意味での「人間のことば」を話していると同時に、特定の固有名詞を冠した「○○語」を話しています。そのことは、当然の帰結として、「○○語」とは異なる「××語」が存在することを意味します。このことから、この世界で言語はつねに複数の存在として現れることがわかります。

それでは、いま世界でいくつの言語が話されているのでしょうか。こういうときによく利用されるインターネットのサイト「エスノログ」を見ると、世界の言語数は約七千になっています。もちろんこれが正確な数だと言うつもりはありません。実は言語の数を数えることは、原理的に見てむずかしいところ

があります。というのは、何が言語で何が方言かが、はっきりと決められない場合があるからです。ですが、そのことを念頭に置いたうえで言うなら、この数はひとつの指標として役立つと思います。世界の国家の数が二百足らずであることを考えれば、ひとつの国家のなかに複数の言語が存在するのは、けっこう異常なことではなく、むしろ普通のことだといえるでしょう。

しかし、言語の話者数のデータを見ると、そこに大きな偏りがあることがわかります。話者数が一億人以上の言語の数はたった八つです。しかも、この八つの言語の話し手だけで、世界の人口の約四十パーセントを占めています。その反対に、話し手が千人以下の言語は約千七百もあります。しかも、それらの話し手を集めても、世界の人口の〇・〇一%にも届きません。

言語の世界には、はなはだしいアンバランスがあるのです。

これらのデータから何を読み取ることができでしょうか。

まず、いくつかの例外を別にすれば、世界の国々はいずれも多言語・多民族社会であるということです。しかし、それら膨大な数の言語がすべて同じ状態にあるわけでもなければ、平等な扱いを受けているわけでもありません。多くの話し手がかかえて通用力のある大言語があるかと思えば、ごく少数の話し手しかおらず、社会的にも低い地位しか占めない少数言語もあります。このように、世界の言語のあいだには、話者数や社会的地位などの点で著しい格差が存在します。

こうした言語的格差をどのように見るかという問題があります。このような格差は、何らかの人為的手段によって是正すべきものでしょうか。それとも、こうした格差は自然に生じた出来事であって、仕方のないものとみなすべきでしょうか。しかしここで「自然に生じた」ということは何を意味するかを考えなければなりません。言語は徹底的に社会的な存在なのですから、そこには厳密な意味での「自然」は存在しないはずです。言語に見られる格差は、社会の他の領域における格差との関係で見なければなりません。ここから、言語的格差を緩和するための言語政策の必要性が生まれてきます。

これまで長い間、ひとつの社会のなかに多くの言語が話され

ていることは、「解決すべき問題」だとされてきました。複数の言語が存在することは、コミュニケーションを阻害し、社会のメンバーの結びつきを弱め、国家のまとまりを危うくするものととらえられました。このような見方は、社会のなかで使われる言語はひとつであることが望ましいという態度を生み、ひいては少数集団を同化したり排除したりする政策を正当化します。この先にあるのは、社会の強制的な画一化の道です。

しかし、社会に多くの言語が存在することは、本当に「問題」なのでしょうか。むしろわたしたちは、社会に複数の言語が存在することを肯定的にとらえなければならないのではないのでしょうか。こうした反省から、「資源としての言語」という見方が生まれました。この考え方によれば、社会のなかで話されるあらゆる言語は、どんなに少数の話し手にしか話されないものであっても、社会全体にとって大切にすべき貴重な文化財としてとらえられます。たとえば、欧州評議会が定めた欧州地域語少数言語憲章には、こうした考え方が見られます。それによれば、地域語や少数言語を保護することは、ヨーロッパの「文化的富」を維持・発展することにつながるとされています。そして、加盟国に、「文化的富の表現」としての地域語・少数言語を公的に承認することを求めています。

他の例を挙げるなら、イタリア憲法では、イタリア語以外に

さまざまな言語がイタリアにあることを認めただけで、それらの言語はすべて「言語的・文化的資源」としてとらえられています。また、スペイン憲法を見ると、「スペインの豊かな言語的様態の多様性は、特別の尊重と保護の対象とされる文化財である」という条文があります。ここでは、スペイン語以外の、カステイリャ語、ガリシア語、バスク語の存在が念頭におかれています。このように、「資源としての言語」という見方には、少数言語の価値を認める方向が含まれています。

しかし、「資源としての言語」という見方にも、問題点がないわけではありません。第一に、社会全体が利用すべき「資

源」あるいは「富」として少数言語が位置づけられることで、その言語を話す言語共同体の意志がないがしろにされるおそれがあります。第二に、「資源」という考え方は、ともすれば「利潤」や「開発」という考え方と結びつき、言語の「商品化」を助長するおそれがあります。そうすると、言語は「金になるかならないか」という基準で序列化されてしまいます。「資源としての言語」という考え方には評価すべき側面がいろいろとありますが、その一方で、こうした危険性がひそんでいることも、忘れてはならないことだと思います。

（かすや けいすけ／言語社会研究科教授）